昭和戦前期の横浜と米国海軍

一九四五（昭和二〇）年八月三〇日、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥の厚木到着とともに、米軍の占領部隊が横浜に進出し、焼け野原となった関内地区などを接収して各種軍事施設を築いていく。これ以降、横浜と米軍との関係は基地問題を中心に今日も継続しているが、その繋がりは、日本の敗戦を契機に始まったわけでなく、日米開戦以前にも横浜と米軍の間には接点が存在した。

一九〇八（明治四一）年一〇月の米国大西洋艦隊（白船）の来航に代表されるように、横浜港は欧米列国の軍艦が頻繁に来航する港であり、白船以外の米国軍艦も度々横浜を訪れ、居留民や市民と交流を深めていった。軍艦入港時、街に溢れる水兵の姿は、横浜の人々にとって馴染み深く、横浜は平時において日本国民と米軍が接する数少ない空間となっていた。しかしながら、こうした事実についてはあまり多く知られていない。

ここでは、昭和戦前期の横浜と米国海軍の関係を市史資料室所蔵の新聞資料群を手掛かりに垣間見ていきたい。

一、外国軍艦の来航

現在、諸外国の軍艦が日本へ来航する場合、東日本においては主に東京港の晴海ふ頭や横須賀の海上自衛隊基地が軍事交流の舞台となっているが、戦前は専ら横浜港がその機能を担っており、横浜は国際貿易港都市であると同時に、多くの外国人水兵の訪れる街でもあった。そのような性格を横浜が持つようになった背景には、第一に幕末以来の開港場であった点、第二に一九四一（昭和一六）年五月まで東京港の開港がなかった点、第三に軍機保持の理由から軍港・要塞地帯である横須賀に外国軍艦を寄せ付けなかった点などが挙げられ、東京にも近い関係から欧米列国の軍艦が横浜港に集まってきた。

儀礼上、歴代の横浜市長は外国軍艦が入港する度に艦隊司令官や艦長の訪問を受けており、『横浜市事務報告書』（市史資料室所蔵、一九二六年～一九三七年）の交際記録には、訪問した軍人の役職や交流行事の内容が記載されている。その情報を基本に防衛研究所図書館所蔵の『公文備考』（旧海軍関係の書類綴）や市史資料室所蔵の新聞資料群を調査した結果、【表一】で示すように、震災直後の一九二四（大正一三）年から日中戦争の勃発する一九三七（昭和一二）年までの期間、延べ九一隻の米国軍艦の来航が確認できた。管見の限り、この数は列国の中で最も多く、一九二五（大正一四）年から一九二七（昭和二）年の三年間と満州事変が勃発した一九三一（昭和六）年を除き、毎年、最低一隻は来航していた。

米国軍艦の来航目的は様々であるが、その形態は①アジア艦隊旗艦の単独来航、②軽巡洋戦隊や駆逐隊など部隊単位の来航、③特務艦「ゴールド・スター」の単独来航の三つに大きく分けることができ、それぞれ横浜の人々との関わり方には特色があった。

二、アジア艦隊旗艦の公式訪問

横浜に来航する米国軍艦の多くは、東アジア地域において活動する艦艇で、主にフィリピンに拠点を置くアジア艦隊に所属していた。同艦隊は東アジア方面の米国の権益を保護するため、時に日本を含む列国の海軍と対峙する一方、一九二三（大正一二）年九月の関東大震災では、横浜港に集結して罹災者の救護に尽力するなど、日本に最も近い米軍部隊でもあった。

装甲巡洋艦「ピッツバーグ」や重巡洋艦「ヒューストン」、「オーガスタ」などアジア艦隊の旗艦が来航する場合は、同艦隊の指揮官が座乗していることもあり、外交的に大きな意味があった。そのため横浜市内では盛大な歓迎行事が催され、日本海軍の将官たちも挨拶のため横浜を訪れた。例えば、一九三三（昭和八）年六月二日、練習艦隊の訪米に対する答礼として、アジア艦隊司令長官モンゴメリー・テーラー大将が「ヒューストン」に乗って公式来訪した際は、入港当日に大西一郎市長主催の歓迎会が関内の料亭「千登世」で行われたほか、横浜公園では、下士官・水兵を対象とした招待会も開かれ、掃部山の芸者衆の手によってサンドウィッチやビールが振る舞われた。一方、六月七日には、テーラー大将の公式訪問に対する答礼として、海軍大臣大角岑生大将や横須賀鎮守府長官野村吉三郎大将が停泊中の「ヒューストン」を訪問し、艦上において幕僚たちと祝盃を交わしている。また、高級軍人や公人との交流だけでなく、市民と水兵との交流行事も盛んに行われ、軍楽隊の公開演奏会（六月五日）や米艦野球チームとの対抗戦（六月六日～七日）が実施されたほか、水兵たちは繁華街へと繰り出していった。

海軍大臣官邸にてテーラー大将を囲む日米の高級軍人　〔1933（昭和8）年6月5日〕
後列2段左端は大西一郎横浜市長　　長野礼子家資料（横浜市史資料室所蔵）

艦隊旗艦の来航は米国でも注目され、ニューヨーク総領事堀内謙介は外務省に「ヒューストン」来航に対する日本国民の熱心な歓迎ぶりが現地の新聞でも報じられている旨を報告している（「米国軍艦「ヒューストン」号歓迎振ニ関スル米国新聞報道ニ関スル件」、『昭和八年　公文備考　D　外事　巻十三』所収）。当時、日本と米国の関係は満州問題などを巡り悪化しつつあったが、「ヒューストン」艦長が現地の新聞に「日本人ノ友誼礼譲ニ厚キコト秩序ヲ守リ活動的ニシテ決断ニ富メルコトニ感銘シ日本ニ関スル従来ノ見解ヲ一変セリ」と述べるように、アジア艦隊旗艦の来航は日米親善の上で一定の効果があったようである。このように横浜は艦隊旗艦の来航によって国内外の注目を集めていったのである。

三、水兵の上陸と横浜の人々

アジア艦隊所属の軽巡洋戦隊や駆逐隊の来航も横浜の街を賑した。横浜市内では、艦隊旗艦来の航時と同様に、市民と水兵との間で各種スポーツの交流戦が行われたほか、繁華街には、航海に疲れた水兵たちが次々と繰り出し、飲食店などを占拠していった。横浜への来航は日本国民との親善だけでなく、軍艦の乗員に休養を与える意味もあり、部隊単位の非公式訪問は、公的な歓迎行事もないため、水兵たちは緊張せずに羽を伸ばすことができた。

上陸した水兵たちは飲食店や商店にとって重要な顧客であり、特に他へ寄港せずに横浜港に直行してきた場合は、それまで給料に手をつける機会がなかったため、横浜にたくさんの金を落としていった。例えば、一九二九（昭和四）年八月二六日にアジア艦隊への配置換えのため、ホノルルから六隻の駆逐艦がやって来た際には、市内の繁華街は、「不景気に青息吞息（ママ）の商売人連中は久し振りの直航米艦の入港で大童になって歓迎ぶり（中略）カフェーもホテルもドルの洪水に久し振りで大繁昌」（『横浜毎朝新報』一九二九年八月二八日付）という状態となり、各所で水兵の争奪戦が展開された。

横浜に来航する米国駆逐艦（クレムソン級）一隻あたりの乗員数は、一一五名前後と少ないが、数隻が同時に入港するため、状況によっては艦隊旗艦を上回る水兵が上陸した。

一九三四（昭和九）年四月一六日に一一隻の駆逐艦を従え、駆逐艦母艦「ブラック・ホーク」（乗員六二五名）が入港した際は、同時に入港した伊国の偵察巡洋艦「クワルト」（乗員三〇九名）と合わせて約二二〇〇名の将兵が横浜港に留まった。それに対し、入港景気に期待する飲食店や商店は水兵を呼び込むため、入港直前から様々な歓迎行事を実施する。まず、本牧沖に艦影が見えると、チャブ屋街の本牧娘たちはハンカチをふりながら入港を出迎え、さん橋に接岸した後は、接客業の女性たちが直接ふ頭へ赴き、マッチや案内状を作業中の乗員たちに配布していった。また、横浜市も水兵たちの遊興に一役買っており、市電の優待券や興業場の入場券を発行する。さらに出港前日の二四日には、中央卸売市場の屋上で歓迎会を催し、ビールなどを提供して水兵たちを歓待した。

山内ふ頭に停泊する母艦「ブラック・ホーク」と駆逐艦群
『横浜グラフ』（横浜市史資料室所蔵）

滞在期間中、駆逐艦の将兵たちは伊勢佐木町や本牧町で騒いだほか、横浜から足を延ばして鎌倉や日光へ観光に行くなど、春の日本を満喫して帰って行った。出港の際、さん橋には多くの人々が集まり、日本娘との別れを悲しむ水兵の姿が見られた。こうした光景は外国軍艦の出港する際の定番となっていたが、四月二六日付の『東京朝日新聞』の記事に依れば、見送り人の数は前年の「ヒューストン」の数十倍だったという。水兵の上陸は繁華街を潤すと同時に、横浜の人々との間に様々な交流を生んでいったようである。

四、荒れる水兵と警察の対応

来航する度に街に溢れる水兵は、飲食店や商店を活気づかせる一方、暴行や窃盗、無賃乗車など様々な問題を起こし、街の治安を悪化させた。それに対して市内の各警察署は厳重に対処し、水兵が酒に酔って暴れ回ると、所轄の警察署は警官を派遣して問題の水兵を拘束した。また、軍艦入港時は水兵を相手とする私娼が伊勢佐木町などに増えるため、県警の保安課は各警察署に命じてその取締を強化している。

しかしながら、毎回のように発生する水兵の問題は一般市民や警官を悩ませた。特にアジア艦隊旗艦「オーガスタ」は、入港の度に様々な問題を起こし、その様子が新聞に大きく報じられた。一九三五（昭和一〇）年五月三日に「オーガスタ」が公式訪問した際は、各種交流行事が行われる一方、タクシーの無賃乗車事件などが発生し、艦内に逃げ込んだ水兵を捕えるため、県警の

【表1】昭和戦前期に横浜へ来航した米国軍艦（1928年～1937年）

年	停泊期間 入港	停泊期間 出港	来航艦艇 艦名〔艦種〕
1928年（昭和3年）	5月 8日	5月17日	ピッツバーグ（Pittsburgh）〔装甲巡洋艦〕
	9月22日	9月28日	マコーミック（Macormick）〔駆逐艦〕他、同型艦4隻
	10月 6日	10月12日	トレントン（Trenton）〔軽巡洋艦〕他、同型艦2隻
	12月 2日	12月 8日	ピッツバーグ（Pittsburgh）〔装甲巡洋艦〕
	12月31日	1月10日	サクラメント（Sagramento）〔砲艦〕
1929年（昭和4年）	4月11日	4月20日	シカード（Sicard）〔駆逐艦〕他、同型艦4隻
	4月13日		ノア（Noa）〔駆逐艦〕
		4月22日	ポープ（Pope）〔駆逐艦〕他、同型艦4隻
		4月23日	ブラック・ホーク（Black Hawk）〔駆逐艦母艦〕
	5月 8日	5月13日	トレントン（Trenton）〔軽巡洋艦〕他、同型艦2隻
	7月16日	7月22日	シカード（Sicard）〔駆逐艦〕他、同型艦5隻
	8月26日	8月30日	ウィップル（Whipple）〔駆逐艦〕他、同型艦5隻
1930年（昭和5年）	4月23日	4月27日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1932年（昭和7年）	3月16日	3月19日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	5月 6日	5月11日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1933年（昭和8年）	5月 8日	5月12日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	6月 2日	6月 9日	ヒューストン（Houston）〔重巡洋艦〕
	11月20日	11月24日	ヒューストン（Houston）〔重巡洋艦〕
	12月 8日	12月14日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1934年（昭和9年）	3月31日	4月 6日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	4月16日	4月25日	ブラック・ホーク（Black Hawk）〔駆逐艦母艦〕
			ポール・ジョーンズ（Paul Johnes）〔駆逐艦〕他、同型艦10隻
1934年（昭和9年）	6月 4日	6月11日	オーガスタ（Augusta）〔重巡洋艦〕
	8月 9日	8月15日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	12月11日	12月15日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1935年（昭和10年）	2月 2日	2月 6日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	3月27日	4月 1日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	5月 3日	5月17日	オーガスタ（Augusta）〔重巡洋艦〕
	8月12日	8月17日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	10月 9日	10月14日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	10月14日	10月18日	チェスター（Chester）〔重巡洋艦〕
	12月10日	12月14日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1936年（昭和11年）	5月25日	6月 5日	オーガスタ（Augusta）〔重巡洋艦〕
	6月14日	6月20日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	9月14日	9月19日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	10月 4日	10月 8日	ラマポ（Ramapo）〔特務艦〕
	12月 5日	12月10日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
1937年（昭和12年）	2月27日	3月 5日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	6月 2日	6月 7日	ゴールドスター（Gold Star）〔特務艦〕
	10月21日	10月23日	スチュワート（Stewart）〔駆逐艦〕
	10月27日	11月 2日	ショーモント（Chaumont）〔特務艦〕
	10月31日	11月 6日	エドサール（Edsall）〔駆逐艦〕
	11月15日	11月23日	バルマー（Bulmer）〔駆逐艦〕
	12月 2日	12月 9日	パロット（Parrot）〔駆逐艦〕

※1:『横浜市事務報告書』大正13年～昭和12年（横浜市史資料室所蔵、大正13～14年版のみ横浜開港資料館所蔵）、『公文備考』大正13年～昭和12年（防衛研究所図書館所蔵）、『横浜貿易新報』、『横浜毎朝新報』、『朝日新聞（神奈川版）』、『読売新聞（神奈川版）』（横浜市史資料室所蔵）より作成。
※2:1923（大正13）年は米国陸軍航空機の世界一周事業を支援するため、延べ11隻のクレムソン級駆逐艦が入港した。
※3:1925（大正14）年～1927（昭和2）年及び1931（昭和6）年は米国軍艦の横浜入港がなかったため省略した。
※4:米国軍艦の詳細については、『世界の艦船　アメリカ巡洋艦史』（海人社、1933年4月）及び『世界の艦船　アメリカ駆逐艦史』（同、1995年5月）を参照した。

外事課まで出動して犯人捜しが行われた。また、翌年五月二五日の公式訪問でも、毎晩のように暴行事件が発生し、市民から「オーガスタ」へ白い目が向けられた。出港前日の六月四日には、事件の発生を危惧した外事課が総出となって市内各所を警戒し、水兵たちの動向を監視している。また、停泊地を管轄する神奈川署も五日未明からさん橋に警戒線を張り、見送りにやって来た接客業の女性たちを風紀上の理由で一斉に検挙した。こうした騒ぎの中、集まった野次馬に見送られ、「オーガスタ」は出港していく。

米国軍艦の来航には、経済的な効果とともに、治安の悪化という問題があり、警察の主導下で街の治安を維持する努力が続けられたのである。

五、米軍人とその家族

停泊期間が長くなると、米軍の将校たちは自らの家族を呼び寄せ、一緒に休暇を楽しんだ。既述の「ブラック・ホーク」の来航では、一般汽船に乗って来訪した婦人たちを出迎える将校の姿が見られた。米国は軍人やその家族の厚生を重視しており、横浜に来航する米国軍艦からもその一端が窺える。

一九三〇（昭和五）年頃から特務艦「ゴールド・スター」が毎年来航するようになり、横浜に馴染み深い軍艦として定着する。同艦の肩書は「グアム島警備艦」であるが、その実態は何でも行う雑役艦（商船）で、普段は拠点間の物資郵送に従事していた。横浜への来航目的も主に物資調達だったが、来航の度に婦人や子供を連れてくるので、横浜の人々を驚かせた。

婦人や子供はグアム島に勤務する文武官の家族である。南海の孤島であるグアム島は物資に乏しく、目立った娯楽もないため、「ゴールド・スター」に乗って各地を巡った。軍人家族は艦内に設けられた客室で過ごし、停泊地に到着後は、上陸して観光や買い物を楽しんだ。横浜には年数回来航しており、クリスマス直前の一二月上旬には必ずやって来た。そして繁華街などで遊興し、酒やプレゼントを大量に購入してグアム島へ帰っていった。

横浜は軍艦の乗員だけでなく、後方で軍隊組織を支える軍人家族も頻繁に訪れる街であり、横浜と米国海軍の関係は、他国の海軍と比べて大きかった。毎年、横浜港に入港する「ゴールド・スター」は、そうした横浜と米軍の関係を象徴する存在で、多くの水兵と軍人家族を運び、横浜の繁華街を賑わしていったのである。

米国軍艦の来航は、日米関係の悪化により次第に減少していき、開戦によって完全に断絶する。その後、再び米国軍艦が来航するようになるが、それは米国が「占領軍」として横浜へやって来る時であった。

（吉田律人）